2Ha-3

幼児期の父親と母親のかかわり方

東京家政学院大家政 鈴木百合子

目的 今日家庭における親の教育機能は、弱体化していると言われており子どもの人間形成にとって日常生活における親との質的に豊かなかかわりが求められている。本研究では、日常生活場面で父親、母親が幼児と現在どのようにかかわっており、これから先どのようにかかわり方を変化させていきたいと考えているのかを明らかにする。

方法 質問紙を作成し分析・考察する。作成にあたっては、親が回答することにより自分自身のかかわり方の現状を知り、新しいかかわり方に気づき、変化させていけるように配慮した。日常生活の具体的な場面として9項目（しつけ、評価、疑問の受けとめ方、基本的生活習慣など）をあげ、5つのかかわり方（内在・内接・接在・外接・外在・）の中から現在およびこれからのかかわり方を選択し回答する。対象は本学幼児グループ、都内幼稚園児の父親、母親、各94名。

結果 1．父親、母親のかかわり方の傾向は、現在、これから、ともに生活場面の特色により変化することが明らかになった。2．現在からこれからへのかかわり方はいづれの場面も父母ともに接在的なかかわり方が増加する。3，子どもからの疑問や評価を求められる場面では父母ともに内在、内接、接在的傾向がみられる。4．しつけの場面では父母ともに外在、外接、接在的傾向がみられる。5．遊びとしつけ、親の要求と子の要求等二つの関係に同時にかかわる場面では五つのかかわり方に分散する。6，遊びとしつけと社会の三つの関係にかかわる場面では現在、内接か外接的なかかわりがおおくこれからは接在的なかかわりをしていこうとする。（研究協力 上田紀子・板倉雅子）